

コリント人への手紙第一9章19節 「自由だからこそ従える」

1A 誰に対しても自由

1B 神のかたち

1C 神への従順

2C キリストにある回復

2B 祭司の王国

1C 王の子たち

2C 霊的な権威

2A すべての人の奴隷

1B 愛の律法

1C キリストに対して

2C 隣人に対して

2B 自分を低くする自由

1C キリストに満ち満ちた姿

2C キリストの使命

3B はっきりとした目標

本文

コリント人への手紙第一9章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、第一コリント 8 章まで来ました。午後に 9 章を一節ずつ見ていきたいです。今朝は、19 節に注目します。「**私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。**」パウロは、今、コリントの町に住むキリスト者たちに手紙を書いていますね。コリントの人たちの好きなのが「自由」でした。自由を謳歌したいと思って、近親相姦の罪を犯している男をそのまま受け入れていたり、また、偶像の宮で肉を食べたりしていました。「すべてのことは許されている」というのが、彼らの標語になっていました。そこでパウロは、キリスト者の自由をしっかりと定義しています。

一つは、「**私はだれに対しても自由**」、もう一つは、「**すべての人の奴隷になりました**」というところ。これほど矛盾しているように聞こえるものはありませんね。一方は、だれに対しても自由だということです。もう一つは、すべての奴隷だということです。人は、この狭間で結構、揺らいでいるのではないのでしょうか？誰からも干渉されたくないとして自由を求める人たちは、孤独になっていく傾向があります。独り暮らしを選び、山里離れたところで自活している人もいます。あるいは、都会の中でひきこもることもあるでしょう。だれからも邪魔されない世界を満喫したいということで、自由を求めます。そして、人々に仕えていきたいと願う人々もいます。社会の中で仕えよう、人々の必要に応えようとしています。仕事で一生涯懸命になるでしょう。けれども、人々の期待に応えよ

うとして、ついに自分自身が心身の健康を壊してしまうことさえあります。人々の奴隷状態になってしまうのです。

ともすると、キリスト者もこのような揺れを経験してしまうのではないのでしょうか？一方では、自分たちは自由だと謳歌して、コリントの人たちのように罪を許す、また人々を傷つけたり、つまづかせたりします。もう一方で、教会の奉仕に熱心になって、燃え尽きてしまうことがあります。しかし、キリスト者は本来、この二つの相反するようなことを、どちらも行っているユニークな、独特な存在です。それをパウロの、ここの言葉から学んでいきたいと思います。

1A 誰に対しても自由

1B 神のかたち

まず、「**私はだれに対しても自由**」という言葉です。これは、ずっとずっと前、つまり神が人を造られた時にさかのぼります。「創 1:26 神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」」神が全く自由であられ、だれの支配も受けておられない主権者で、この方のかたちに人は造られています。交読文で読みましたように、「詩 8:5-6 あなたは人を御使いよりわずかに欠けがあるものとしこれに栄光と誉れの冠をかぶらせてくださいました。6 あなたの御手のわざを人に治めさせ万物を彼の足の下に置かれました。」とあるとおりです。ですから、人は神の造られたものを支配しこそすれ、支配されることはないのです。これが、神が人を造られたデザインであり、それゆえ人は全き自由と、権利を有しています。

1C 神への従順

けれども、ここで大事なのは「神のかたち」に造られたということです。自分自身は神ではないのです。あらゆるものから自由になるのであれば、自身が神の主権に生きる必要があります。神に信頼し、従い、交わる必要があります。神への従順があるからこそ、他のものから自由になるのです。

ところが、今の世代はどう言っているのでしょうか？あらゆるものから自由になりなさい、と教えます。個性とか、自分の気持ち、心地よいこと、それを自分自身で選べることが大事と教えます。従うことを教えれば、それは押しつけることなのだ、となるのです。けれども、それを初めに言い含めたのは、あの古い蛇、すなわちサタンなのです。「創 3:5 それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。」そう言われて、食べた結果、自由を失いました。自分は神から自由になりたいと思って食べたのですが、罪の奴隷、サタンの奴隷になったのです。

2C キリストにある回復

そこで、キリストが世に来られました。キリストこそが、神の本質の現れです。「ヘブ 1:3 御子は神

の栄光の輝き、また神の本質の現れであり…」この方に、神のかたちの完全な姿があります。この方が人となられて、私たちの罪を取り除くために十字架に付けられ、そして、よみがえらえました。この方を信じ、心に受け入れるならば、聖霊によってこの方が私たちに住んでくださいます。そして、私たちが罪を犯したため損なわれていた、神のかたちがこの方にあって癒され、回復します。

キリストを信じて、初めはあまり分からないかもしれませんが、しかし、確実に、神の御霊によって、ご自身は新たに生まれています。自分は、神に対して死んでいたけれども、今は生きて、自分の霊は神につながっています。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。(Ⅱコリ 5:17)」そして、自分というものを取り戻します。神を信じたら、それは洗脳みたいなものではないか？と思うかもしれませんが、いいえ、むしろ、全体の流れに無目的に従っているところを、自分自身が考えて、判断して、何が良いことなのか、正しいことなのか、完全なことなのかをわきまえ知るようになるのです。「ロマ 12:2 この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」主体性が出てくるのです。他の人々に対して自分が自由になっていることに気づきます。

私が、自分がキリスト者として生きていくことはできるのか？と悩んでいた時に、父のことがありました。私は長男ですから、家を継がないといけないと思いました。父が最近、責任をもって自分の家のために、まだ墓石がなかった、他県にあった先祖の墓を自分の家の近くの墓地にお骨を移し、先祖の墓を建てたばかりだったのです。ですから、そのお墓を引き受けることがキリスト者になつたらできないと思ったのです。けれども、イエス様より家族の人々を愛するのは、わたしの弟子にふさわしくないという、イエス様のことばに触れて、決断しました。最も大きな親孝行は、自分自身がこの方を信じることだと。そして両親にイエス様を紹介して、救われることが最も大きな親孝行だと思いました。

それで親も信じました。先祖を敬っていないなあ、と思っていた自分はむしろ、信じる前には考えつきもしなかった興味が出てきました。自分の父のルーツです。彼の両親についていろいろと聞いたことがあります。父は八歳の時に母を亡くし、父の父はすでに他界していました。そして、神に、自分の先祖について感謝したのです。そんな思い、信じる前は起こりもしませんでした。信じる前は先祖の墓を気にしていましたが、それは他の人々の目がただ怖いだけであり、本当の意味で先祖を敬ってなどいませんでした。これが、自由にされているということです。

2B 祭司の王国

キリストによって神のかたちが回復されているということは、アダムのように被造物を支配する、神の支配される国を相続するというに他なりません。神は、ご自分の民を選ばれて、召された時に、次のように宣言されました。「出エジ 19:6 あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖な

る国民となる。」祭司の王国とは何でしょうか？祭司とは、神と人との仲介者です。アダムが、神のかたちに造られて、被造物を支配するように命じられました。被造物にとって、アダムは神を代表する者になりました。アダムの管理によって、神の支配を被造物は体験します。それと同じように、神の祭司によって、他の人々は神の祝福を受け、その恵みが分け与えられます。そして、そうした祭司たちが集まっているところで、神が王として支配されます。それが祭司の王国です。

これは、神がイスラエルの民に対して語られた言葉ですが、キリストにあつて異邦人にも同じ召命を与えられました。「黙 1:5b-6(イエス・キリストは)私たちを愛し、その血によって私たちを罪から解き放ち、6 また、ご自分の父である神のために、私たちを王国とし、祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくあるように。アーメン。」私たちを王国にし、祭司としてくださいました。ですから、私たちは、だれに対しても自由な存在になっています。だれの奴隷にもなっていません。

1C 王の子たち

イエス様は、とてもユーモアを込めた話をペテロにされたことがあります。ペテロの家に、神殿税を徴収に来た人がいました。イエス様は彼に尋ねられました。「マタ 17:25 シモン、あなたはどう思いますか。地上の王たちはだれから税や貢ぎ物を取りますか。自分の子たちからですか、それとも、ほかの人たちからですか。」ペテロは、「ほかの人たちからです。」と答えると、イエス様は言われました。「17:26 ですから、子たちにはその義務がないのです。」イエス様は、この神殿を、「わたしの父の家」と呼ばれたことがあります。事実、そうなのです。ユダヤ人たちが神を敬い、あがめ、礼拝を献げていますが、そこは自分のお父さんの家なのです。そして、この方に連なる者として、自分たちは王のような身分なのです。神を王とし、御子が王子ですが、その神の家族の中に養子縁組にされています。ですから、私たちは王の子たちなのです。だから、当然、神殿税など納める必要ないでしょ？とイエス様は言われています。

けれども、こうも言われます。「17:27 しかし、あの人たちをつまずかせないために、湖に行って釣り糸を垂れ、最初に釣れた魚を取りなさい。その口を開けるとスタテル銀貨一枚が見つかります。それを取って、わたしとあなたの分として納めなさい。」これは次の、「すべての人の奴隷」ということにつながりますが、王の子どもであるけれども、他の人々をつまずかせないために、納税しなさいと勧めます。かなりの余裕ですね！これが、だれに対しても自由という姿です。神の国を受け継ぐ、キリストと共に統べ治める王にしてくださいましたのです。ですから、納税であろうが、何であろうが、自分はだれにも支配されていないのです。

2C 霊的な権威

このように、王の子としての身分が与えられているだけでなく、祭司として霊的な権威も与えられています。霊的な権威とは何か？分かりやすいのは、ヤコブがエジプトに降りた時です。自分の息子ヨセフがエジプトにいるのを知って、家族でエジプトに下ります。そして、ヤコブがファラオのとこ

ろに連れて来られます。そして、こうあります。「創世 47:7 ヤコブはファラオを祝福した。」祝福するほうが、祝福される人より上位にあります。ファラオは、当時の超大国エジプトの王であり、政治的権力は世界一です。けれども、そのファラオをしてさえ、ヤコブに与えられた霊的権威には額づいているのです。これが、祭司に与えられた権威です。主の御名によって祈ることは、地上の王でさえ、その権威に頭を垂れます。ですから、キリスト者は王の子どもだけでなく祭司でもあるということは、霊的なことも含めて自由にされていることを意味します。

思い出すのは、トルコで 20 数年、教会を牧会していた、アメリカ人の宣教師アンドリュー・ブランソンさんのことです。彼は、2016 年にトルコ当局が拘束して、不法に抑留されました。それで、当時のトランプ政権が釈放させるために、経済制裁に踏み切りました。その圧力で、ブランソンさんは釈放され、帰国の途に着きました。トランプ大統領は、大統領府、ホワイトハウスに彼を招きました。トランプ大統領にとっては、これは大きな成果として国民に誇る瞬間でした。ところが、アンドリューさんは、「あなたのために祈りたい。」と申し出たのです。トランプ大統領は頭を垂れました。彼が、イエス様の名によって、神の祝福と知恵が与えられるように、またいろいろなことを祈りました。その時、ちょうどヤコブが、超大国の王ファラオを祝福した時のことに重なりました。ブランソンさんは、私たちの教会と同じぐらいの人数、非常に小さな教会の一牧師です。けれども、世の権力者の祝福のために祈る、霊的権威が与えられています。

2A すべての人の奴隷

このように、霊的な権威が私たちには与えられ、また将来、神の国を受け継ぐ、神の子たち、王子たちの身分を受けているのです。だれからも自由なのです。けれども、自由だからこそ、実は、今、この地上において、しもべの姿を取ることができます。「**すべての人の奴隷になりました。**」

1B 愛の律法

パウロは、ガラテヤ人への手紙 5 章で、「5:13 兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい。」と言っています。自由を得ることができた。その自由を、愛をもって仕えるために用いなさいと教えています。実は、全く、だれからも支配されないという自由を得ている人が、本当の意味で、神にそして、人に仕えることができます。そこには、愛があるからです。

自分はだれにも支配されていないから、人々に仕える必要はありません。けれども、そこで敢えて仕えるのであれば、それは、相手を愛しているから、そうなのです。全く仕える必要がないのに、それでも仕えるという決断をするのは、その人に愛があることの証拠です。ルツが、姑ナオミに付いていく決断をしましたが、ナオミは、自分の家に帰りなさいと迫りました。それでも、ルツはナオミに従う決断をしました。ルツ記には、「誠実」という言葉が何度か出てきます。それはヘセドというヘブル語で、「真実な愛」とも訳せる言葉です。忠誠をともなった愛です。

愛があるから、恐れから解放されています。「Iヨハ 4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」神が自分を愛していることを知り、キリストがご自身の命を自分のために捨てられた愛を知った時に、初めて自分というものを捨てることができます。けれども、キリストにある神の愛を、信仰をもって受け入れていなければ、そこにあるのは、どんなに良くつくろったとしても、「自分」であります。ですから、人に仕えているようであり、実は、自分が他の人たちから良く見られたいからという動機であったり、あるいは、自分が救われるためということがあるでしょう。そのような動機で何か良いことを行っている時は、必ず恐れがあります。他の人たちからどう思われるだろうか？という恐れです。あるいは、自分はきちんと良い行いをしていないと救われないのではないか？という恐れです。何か良いことをしているように見えていて、実は、自分のために自分自身に仕えているのです。真実に仕えるには、その自分というものが取り除かれたいけません。そのマジックが、愛なのです。しかも、全き愛です。自分が何をしたから愛されるというものではなく、まだ罪人であった時に、御子を下さるといふところの大きな愛です。その愛に触れた時に、イエス様を信じるようになります。そして信じたら、その愛によって自分というものを捨てる勇気を得るのです。

1C キリストに対して

まず、キリストに対して、その戒め、命令を守るために、自分を捨てることができます。イエス様は言われました、「ヨハ 14:15 もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずですよ。」神の命令、キリストの命令は、それを行なって救われようとしている限り、決して守ることはできません。金持ちの青年が、悲しんで去っていったようになるのがおちです。唯一、守ることができるのは、愛です。キリストに愛され、それで自分がこの方を愛する時に、初めて戒めを守ることができます。この方のしもべになることができるのです。使徒たちは、自分のことを「イエス・キリストのしもべ」と呼びましたが、すべてを明け渡すことなど、その方から愛されていなければ決してできないことです。

2C 隣人に対して

そして、その愛によって、初めて人々に仕えることができます。前回の学び、8章にて、パウロは、弱い人たちのつまずきとならないように気をつけることを話しましたが、「8:11 この兄弟のためにも、キリストは死んでくださったのです。」と言っています。自分の周りにはいる人々が、自分の愛するキリストが死なれるほどの人々なのだとなります。だから、大切にしようします。

2B 自分を低くする自由

このように、自由を得たから、愛がそこにあることが分かりました。次に、自由を得ているから、もうこれ以上、自分を高くする必要がなくなったと言ったらよいでしょうか。自分が、神の恵みによって、キリストにあって引き上げられたから、だから、自分で自分を高める欲求から解放されていると言ったらよいでしょう。

1C キリストに満ち満ちた姿

「コロ 2:10 あなたがたは、キリストにあつて満たされているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。」とパウロは、言いました。すべての支配と権威のかしらであるキリストに満たされているのであれば、もう、これ以上、高められる必要はありません。イエス様は、自分を高くする者は低められ、自分を低めることは高められると言われましたが、この、自分を低くする道を歩むことができるのです。なぜなら、もうキリストにあつて高められているからです。

テレビで、あまりよくない意味で話題になってしまった、小室眞子さんのことですが、まだ皇族におられた時、大学生だった時、国際基督教大学に通っていました。妹の佳子さまもそうですね。クリスチャンの学生に、実際にお二人を見たり、会ったりした人々から、話を聞くことができました。ともかくも、気さくなのだそうです。特別扱いしないでほしい、他の普通の学生と同じような格好をしているし、同じように動いておられたようです。皇族におられるので、かえって、自分の身分の高さを見せびらかす必要はないですし、むしろ、外に出れば自分を低くするだけです。

そこで思ったのは、キリストにある神の子どもとしての身分、王であり祭司である身分でした。あまりにも引き上げられたところにいます。ですから、この地上において自分を高めたところで無意味なことを分かっています。パウロも、自分にとって有利だと思っていたことが、キリストのことを知ったことのゆえに、塵あくただとみなしていることをピリピ書で話しています。だから、低くなるだけなのです。キリストにある高みを知ったら、後は下がるだけです。自分が低いところにおいても、キリストにある者、神の子どもの身分にしていることを知っているのです、低くしていることができます。

2C キリストの使命

そして、キリストに捕らえられた者は、キリストの使命を全うしたいと願います。この方に結ばれているので、この方の道を自分も歩みたいと願います。イエス様が通られた道は、苦しみがあり、けれども、復活の力があり、その後に栄光があります。パウロは、こう言いました。「ピリ 3:10-11 私は、キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、11 何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」キリストの苦難にあずかる、とありますが、ここの「あずかる」は、「交わり」のことです。キリストに従えば、キリストを知ります。この方を体験します。その交わりが何よりも貴いものとなります。ですから、キリストが仕えられたように、人に仕える者となっていきます。

3B はっきりとした目標

そして、何とんでも、「はっきりとした目標がある」ことが、自分をすべての人の奴隷にしていけます。「より多くの人を獲得するために」すべての人の奴隷となっています。この獲得とは、福音を宣べ伝えて、救われることです。その目標があるので、自由に、自分のこだわりを取り去り、人々の奴隷になっていくことができるのです。まだキリストの内にいないのなら、他のことが自分

のアイデンティティー、自分の存在の拠り所となっています。ユダヤ人であれば、ユダヤ人であることに誇りを持っていました。けれども、パウロはキリストに捕らえられたので、ユダヤ人にはそのままユダヤ人として福音を伝えましたが、異邦人に対しては自分のユダヤ性を前面に出さず、律法のない人のようにふるまいました。この前、お話したように、あるユダヤ人の聖書教師は、来日して、豚骨スープに入ったラーメンを食べていました。そのようなことができるのです。福音のために、自分にあるものを捨てる自由が与えられているのです。

いかがでしょうか？自由を得たということは、自分に対するこだわり、自分を高めようとするところからの自由です。だから、だれからも強いられることなく、愛によって人々に仕えることができます。